

子どもの思考を深める体育科授業づくり —ゴール型ボール運動—

体育科研究部

1 体育科における〈他者〉を楽しみ続ける姿

体育は運動・スポーツを学習対象とするからには、できるようになることを避けて通ることはできない。できることの中身を高めることは、味わえるおもしろさの質を高めるからである。そして、できるためには、同時に「わかる」ことが求められる。このような過程こそ体育科授業の本質であると考えている。体育での「わかる」とは運動技術に対する理解や認識のことを指す。「わかる」は運動の観察、比較などをもとにした技術の分析・総合の過程のなかで発展していく。そのためには、自分とは違う対象（目標とする運動像や友達の動き等、自分の動きとは違う習熟度合いと関わる必要がある）なのである。「できる」ことには一定の時間と繰り返しの練習が必要であるが、習熟のための練習が「わかる」を土台にしていないと子どもの意欲的な学習にはならないと考える。

器械運動や水泳などのクローズドスキルと呼ばれる運動領域の他にボール運動（ゲーム）領域があり、この領域の運動は「オープンスキル」と呼ばれる、「たえず変化し不安定な環境でなされ、予測が困難なスキル」であるとされている（阪田ほか,1995）。ゲームの中では、個人の動きだけではなく、チームプレーと呼ばれるようなチームの仲間との連動した動きが必要であったり、相手との関係の中で攻撃のスペースが生まれたり、スペースがつぶされたりするため、オープンスキルの運動における〈他者〉は、対象とする運動とともにチームの仲間との関係や相手チームとの関係、その関係の中で生じる空間が〈他者〉として立ち上がると考える。ボール運動を楽しむことは、意図を持って攻撃したり守ったりできるために作戦を考えたり、考えた作戦をチームの仲間と行ってチームプレーを楽しむことや相手の動きを予想しながら、相手との駆け引きを楽しむことであると考えている。

子どもたちには、互いに高まりあったり、直面した課題を乗り越えたりといった「わかった」「できた」ことを、意識的にとらえながら学習を進めた授業経験を積み重ねてあげることが大切であると考えている。このためには、一人一人の学習課題が設定される授業ではなく、クラスのみんなで解決に挑む共通の学習課題が設定される必要がある。すでに技ができるようになっている友だちと、まだできない自分が同じ場で同じ課題を共有していたからこそ、互いに比較したり、運動のイメージを伝え合ったりしてすることができる体育授業を考えている。

2 授業づくりについて

(1) 戦術課題に迫るための教材化の工夫

学習対象となるゲームについて、岩田（2016）は「子どもの年齢や経験に応じた多様なゲーム形式」の必要性を示している。岩田（2016）が「大人によってプレーされるフル・ゲームの中に包み込まれている面白さを、子どもの体格や技能水準に合わせた規格のゲームにおいて味わわせようとするゲーム」の範囲においては、「依然として、大人のゲームの持つ戦術的な複雑さをそのまま持ち込むことになる」と指摘しているように、子どもに戦術的課題を学ばせるためには、既存のスポーツとしてのボールゲームを教材化する必要がある。また、子どもが運動技能につまずくことなく戦術的内容を理解できるように、競技スポーツのルールや用具、コート等を改変して、ゲーム教材として作り出していく。

(2) 子どもの思考を深めるための工夫

運動の結果を振り返ることで、運動に関する知識が蓄積され、そこで蓄積された知識を用いる「認知技能」（アンダーソン，1984）はより洗練されると考えられることを踏まえ、授業の中でのゲームにおける児童の学習は下記のような過程で進めることができると思う。

プレー前：作戦を考え、走る方向やタイミングなどを確認する。

プレー中：事前に確認した作戦を実施する。

プレー後：プレーヤーとゲーム観察者とでプレーについて振り返る。

チームで考えた作戦を試合で試した後に振り返る活動を行う。作戦を試し、振り返ることで修正したり、新たな動きを付け加えたりする。また、試合中は自分のプレーを客観的に見ることはできないため、作戦通りに動くことができたかどうかの判断は、ゲームを行ったプレーヤーの主観だけでは判断をすることは難しいと考えられる。そこで、プレーを行っていない客観的な視点も取り入れて振り返りを行いたいと考える。

3 学習の進め方について

ボール運動は総じて、常に試合中の状況判断を前提にしながら運動技能を発揮しなければならないことから、子どもにとって難しい側面を持っている。岩田（2016）はボール運動の指導において意識しておく事柄として、「ゲームの状況判断において、『味方』『相手』、そして、『ゴール』の位置といった多くの契機（判断の拠り処となるモメント）に包み込まれている」と指摘している。試合の中で子どもたちが「何をするのか」「いつするのか」というプレーに関する状況判断を行うことができるためには、ルールを含めた教材化に加えて、状況判断を行うことができるための知識を学習する必要があると考える。ボール運動において、攻撃側は有効な空間を見つけたり、生み出したりして、その空間を使って攻撃する。一方、防御側はその空間を守ることが課題となる。この空間をめぐる攻防を学習課題として学習を進めていきたいと考える。